

2026 年度「現代政治の 이슈ー（政治学現地研修・東北）」実施報告

9 月 24 日（木）から 26 日（土）にかけて、政治学現地研修（東北）を総勢 29 名の参加学生とともに実施しました。

この現地研修は、4 回にわたって事前学習をした上で、実際に東日本大震災とそれに続く津波による被災地域を訪れ、被災の実態やその後の復興について語り部の方や行政職員の方から実体験を伺うことで、被災から 15 年以上の年月が流れた今だからこそ、自分ごととして学びを得ることを目的としています。

今回は、以下のような行程で、北は陸前高田市、南は名取市閑上地区までバスで移動しながら、現地研修を実施しました。



2 日目朝、宿泊施設での全体写真

【1 日目：9 月 24 日（木）】

各自で仙台駅まで向かい、集合した仙台駅からまずはバスで陸前高田市に向かいま

した。その途中、大谷海岸に立ち寄り、バス車内で説明を受けた BRT（バス高速輸送

システム）が大谷海岸駅に到着するのを発見して実感を深める場面もありました。目の前に広がる大谷海岸の風景を守るためにどのようなやりとりが住民と行政の間でもたれたのかを知る機会ともなりました。

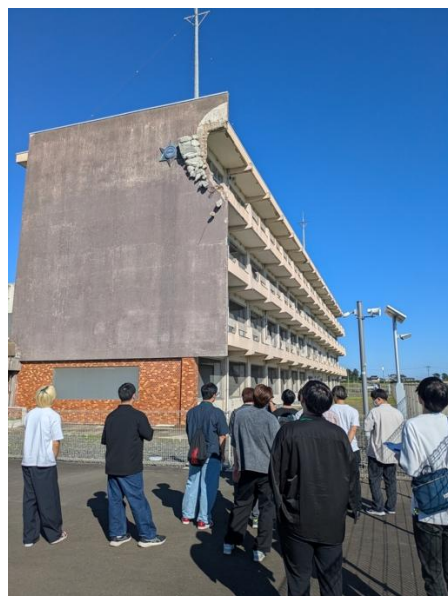


その後到着した岩手県陸前高田市では、いわて TSUNAMI メモリアルを訪れ、近隣の「奇跡の一本松」だけでなく、新設防潮堤と、その設置のために山から運ばれた土砂、その土砂を運ぶための画期的な方法（「希望のかけ橋」）とそのために用いられた構造物、さらには他に例を見ない数の震災遺構から津波被害の凄まじさに触れました。災害危険区域の土地利用のあり方、高台移転された住居や生活インフラのある地区もバスで巡りました。



それから宮城県気仙沼市に移動し、杉ノ下地区で被災した方々の慰霊碑に手を合わせ、気仙沼市震災遺構・伝承館（旧・気仙

沼向洋高校）を語り部の方に案内いただきながら視察しました。語り部の方からは、旧・気仙沼向洋高校に津波が到来したときの様子、同校生徒の避難行動や、被災時に校内に残ることになった人たちの屋上での避難時の様子を詳しく説明を受けるとともに、語り部の方の被災体験を伺いました。3階部分に流れ着いた車に衝撃を受ける参加学生がいたこともさることながら、教室脇に残された高校生の教材を目にして「そこにあった日常」に触れた気がしたと述べる参加学生もいました。



南三陸町では、被災した防災対策庁舎に寄り、震災後に盛り土された高さ、震災

時に発生した津波の高さを実感するに至りました。実際にその防災対策庁舎で被災された当時の南三陸町の副町長から、その当時の様子、その後の町の復興をご説明いただいた上で、意見交換を行いました。



この日は、南三陸町の宿泊施設で宿泊。夕飯に出された地元のタコの刺身に感動しながら、被災地というだけでない東北の魅力に触れる機会にもなりました。



【2日目：9月25日（金）】

まずは、南三陸町の戸倉中学校で、この地に到来した津波の高さを実感したのち、児童 90 人が高台避難した戸倉小学校跡地も訪問し、当日の避難行動につながったそれまで 2 年間の教員同士のコミュニケーションを伺い、実際に児童が教員たちと避難した高台、そしてさらに上の最終的な避難場所となった神社へ、駆け足で登って行きました。



その後、石巻市に移動し、児童 74 名と教員 10 名が犠牲になった大川小学校跡地に向かいました。ここでは、犠牲になった児童の遺族で、自らの近隣の学校の元教員でもある語り部の方に、発災時の大川小学校での話だけでなく、震災前の大川小学校

に存在した日常、その尊さが伝えられました。予め備えておくことがどれほど重要かを思い知る場面となりました。大川小学校のすぐ裏手にある山を駆け上がり、ここに逃げれば救えたはずの命を悔やまずにはいられない瞬間でした。



女川町では、銀行員のお子さんが犠牲になった遺族である語り部の方に、組織における危機管理のあり方、そして何よりこれから組織のなかで働いていくことになる学生に対して意識しておいてほしいことを伝えていただいたのち、参加学生との間で意見交換をしました。



現在の女川駅と海を結ぶエリアにある復興商店街を視察しながら、各自で昼食をとりました。近くには、土台ごとなぎ倒された交番の建物が残されているのも確認し、いかに津波の威力が凄まじかったかを実感する機会となりました。

次に移動した東松島市では、野蒜地区の慰霊碑に手を合わせたのち、震災遺構となっている旧・JR 野蒜駅に立ち、指定避難場所に向かった乗客と、自らの判断で高台に避難した乗客が辿ったその後に触れることとなりました。大きく曲がった線路も残されており、津波の威力を改めて実感しました。



野蒜地区では、併せて、高台移転地などを視察したのち、東松島市役所職員に、震災前からの取り組みとともに震災時の市の被害状況、その後の復興における工夫と課題、さらには自身の自治体職員としての震災対応もご説明いただき、複数の参加学生からの質問に答えていただきました。



この日は、仙台駅周辺のホテルに宿泊しました。

【3日目：9月26日（土）】

午前中、バスで名取市閑上地区に向かいました。バス車内では、この現地研修をコーディネートしてくださり、帯同して、多くのご解説をいただいた「3.11メモリアルネットワーク」の武田真一氏自らの震災時の新聞社勤務時の経験を教えていただきました。

到着した閑上地区では、震災後から地域住民をサポートしまとめてこられた自治会長に、震災当時から長く続いた避難生活の実相を中心にお話いただきました。熊本や能登での震災時に現地に複数回赴かれた自治会長は、自らが経験した避難の苦労がその後の災害でも繰り返されないために何が

必要かを一緒に考えてほしいと、私たちがこれからも考えていくべき問いを投げかけられました。



昼食は、同じ閑上の「かわまちてらす」で各自でとり、その前後に近隣にある名取市震災復興伝承館を訪れた参加学生も多かったです。

昼食後、バスで移動し、仙台市荒浜小学校震災遺構を訪れました。児童や住民の避難先となった校舎などを視察するとともに、バス車内で説明を受けた多重防御に関して、パネル展示や、体感するための模型で確認しました。また、当時の児童や教員がその時の様子を証言する映像も鑑賞しました。



最後は、東日本大震災慰霊之塔・荒浜慈聖観音で手を合わせ、慰霊碑に刻まれた名前と年齢、そのなかの1人の消防団の青年の話を武田真一氏から聞きました。その後、仙台唯一の海水浴場深沼海岸を眺めました。この日の海は、とても穏やかでした。



当初の予定通り、14時半頃にバスで仙台駅に到着し、解散。思い思いに帰途につきました。

同じ地震で発生した津波ですが、異なった被災状況、また、その場でとられた異なった避難行動、さらにその後のさまざまな復興のあり方の選択や住民や行政の方々がたどった軌跡に触れた3日間の視察でした。

この現地研修が投げかけたのは、災害が発生した時にどう行動すべきかだけでなく、事前にどう備えることができるか、普段からの日々のコミュニケーションがいかに重要かなど、大学在学中だけでなく、大学卒業後にさまざまな方面に向かっていく参加学生にとって多くの学びを得る機会となったことと思います。

視察や意見交換を受け入れてくれたみなさま、また各所とのコーディネートとガイドをご担当いただいた「3.11 メモリアルネットワーク」代表理事の武田真一氏のご協力により今回の現地研修を実施することができました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

文責・松本